

存在感増すASEAN諸国の人材 日本は国際化が急務



ASEAN諸国の人材レベルを

日本企業は正しく評価できていない。

難民や技能実習生など多くの

外国人材を迎えるサンテックは、

あるべき未来を考え、体現している。

株式会社サンテック代表取締役社長

青木大海

インタビュー 高瀬文人(編集部)

——本社工場を「ラーニングセンター」と名付けられています。興味深い取り組みですね。

青木 そもそも私は、「地球環境のポリシューメーカー」になりたいと思っていました。しかし二〇〇七年、米国大使館商務部から投資銀行に転職した直後にリーマン・ショックが直撃して世界経済が大混乱に陥ったのです。私はそれまでのキャリアを一新して、父の経営する会社に入りました。熱交換器や圧力容器などを作るサンテックの現場は、高度な技術を持った職人の集合体。現場を知らない私は、当初、彼らの中に溶け込むことに苦労したものです。「ゼロコンマ何ミリ」の精度を実現する加工技術が誇り。

しかし、「いいものを作れば売れる」という日本人の、のづくり神話は、世界で通用しなくなっていました。ASEAN諸国が日本と同等の技術レベルに達して、コスト競争が厳しくなっています。そんな時、「うちだって、地球環境に貢献する水質浄化装置や熱交換器を作っている」と、かつて父に言われたことがヒントになりました。

高い技術で世界に貢献すれば、その現場こそが、職人の技が輝くステージとなる。環境技術は、ODAで完成品を供与するのではなく、彼らが持続可能な生活を営めるスキルとして伝えるからこそ価値があると考えたのです。

世界がネットにつながる今は、本質よりも相手に伝わる

ことが大切。伝え方（表現の仕方）こそが最も重要なのです。彼らの目の高さで、理解できる言葉に移し替えて伝えよう。だから工場を「フリーングセンター」と名付けました。——“All for the Family”（すべては家族のために）という企業ポリシーも新鮮です。

青木 家族を大切に思わない人はいません。経営の核は、会社や経済社会のためよりも、守るべき人のために一生懸命頑張る、ということに置くべきではないか。

一六年に、ミャンマーの技能実習生を三人採用しました。彼らの家を見に行つて、当時アジアの最貧国と言われていたミャンマーに、日本で学んだ技術を使って自国で活躍できる場所を作ろうと、現地法人を設立しました。日本で一生懸命学んだ彼らは、いまやミャンマー随一の製缶技術をもつて、クーデターで大変な中でも、次々に受注を得て自分の力で稼いでいます。ミャンマーではプレミアムウイスキーがブームですが、今やタンクを作れるのは彼らだけ。また、天然ガスを貯蔵するタンク、お米を精製するプラント設備など、まさに国を豊かにするために働いています。“All for the Family”は、国境を越えた仲間意識となったのです。

日本はそういったスキルを、彼らが学ぶ水先案内となる

友好関係を通じて伝えるビジネスをすべきでしょう。

——日本企業とASEANの関係をどう見ていますか。

青木 最近、日本は「NATO」と言われています。“No Action Talk Only”と、とにかく結論が遅い。イエスともノーとも言わない。ASEAN諸国の大学のレベルはとも高くなって、GAF Aが競って採用に来るのですが、技能実習生を使う日本企業は彼らを労働力としか見ていません。シリア難民を社員に採用した時には、地元の入管行政がなぜだと言ってくる。考えが古いのです。本人たちも見下されていると感じていて、韓国やオーストラリア、ヨーロッパ諸国に向かっていきます。彼らの国は魅力的なマーケットであり、お客様なのだという意識を持つべきです。そこに出てきているのが中国で、費用負担してASEAN諸国の若い経営者たちを呼び、着々とネットワークを築いています。私も日本商工会議所青年部（YEG）の国際ビジネス委員長として、アジアの各国商工会議所青年部とのつながりを構築し国際事業を展開するなど、状況をなんとか変えよう、人材交流のプラットフォームを作りだそうと日本の国際化を後押ししておりますが、何よりも、国際化教育の転換がまさに今、絶対必要だと、私は強く感じています。●